

900号記念寄稿

目 次

新潟県医師会

会 長 堂 前 洋一郎…………… 2

新潟大学関係

学 長 牛 木 辰 男…………… 3

医学部長 佐 藤 昇…………… 4

病 院 長 富 田 善 彦…………… 5

担当役員

元広報部長 内 山 政 二…………… 6

現広報部長 上 野 光 博…………… 7

広報委員会委員

委 員 長 佐 藤 雄一郎…………… 8

副委員長 橋 立 英 樹…………… 9

委 員 勝 井 豊…………… 9

〃 高 塚 尚 和…………… 10

〃 磯 部 賢 諭…………… 10

〃 恩 田 晃…………… 11

〃 平 塚 素 子…………… 11

〃 永 井 雅 昭…………… 12

新潟県医師会報900号発刊に寄せて



新潟県医師会

会長 堂 前 洋 一 郎

新潟県医師会報は発刊から数え900号を迎えることになりました。第1号の発刊は1949年6月10日ですので75年が経ちました。人で例えると喜寿、現代風に言えば後期高齢者となります。この75年間一度も休むことがなく発刊が進められたことは、歴代の広報委員、担当理事、事務局員においては並々ならぬ労力と熱意があったと思われます。これらのご努力に敬意と感謝を申し上げます。

前会長の渡部透先生も800号記念誌に引用しておられましたが、第1号発行の巻頭言に中山又吉先生が会報の持つ使命について書かれています。まず会報は会員への通報機関であるとともに会員の横の連絡、執行部への縦の連絡を果たす役割を行う必要があると説いています。さらに医師会を通して各自結束力を図るかなめとしての面、また情報発信の面が存在すると述べています。このお言葉は現在の会報でも通じるものと思われます。

さて、令和7年度の広報部（会報編集の担当部）の事業計画を見ても以下のように記載されています。県医師会の使命を全うするためには、組織強化が必要です。組織強化とは私達がよりよい医療を提供し続けるための発言力を強化することを意味します。このために、県医師会と県民をつなぐ架け橋、また、会員相互をつなぐ架け橋としての役割を広報部は担っていき、情報収集と情報発信、双方向のコミュニケーションを図ることにより、会員はもちろん、県民、未加入医師への県医師会の認知拡大を図り、存在意義を高めてい

きます。この事業計画はまさしく医師会報の使命であり、第1巻の医師会報の中山先生の巻頭言に通じるものです。

前回の800号記念誌は2016年11月号ですから8年余り経過しており、この8年間は世界全体が激動の時代であり、医療界もその影響は免れなかったようです。それはコロナ感染のためです。特に2020年からはほとんどの会議がオンラインで行われており、わざわざ会議で東京に行かなくても職場から出席でき、時間の短縮になっています。コミュニケーションの方法が変わり、またDXの導入により、オンライン診療、電子処方箋、マイナンバーカードの保険証など様々な変革が起きています。さらに紙の媒体から電子媒体に代わりつつあり、各種の会報など電子媒体に移行している時代となりました。ただ電子媒体は場所も取らなくていいのですが、我々の世代は文字を紙で見ること慣れており、すべて電子化するには抵抗があります。このまま新潟県医師会報は紙の媒体で継続していただければありがたいと思います。年寄りの希望でしょうか。

今後、県医師会報の使命は良い医療を提供し続けるための情報発信、また会員相互の理解、伝達の手段、一般県民のための情報誌としての役割は永遠に継続しなければならないと思います。今後の県医師会報の益々の充実、発展を期待して900号発刊のお祝いの言葉といたします。

新潟県医師会報の第900号発刊のお祝いに



新潟大学長

牛 木 辰 男

新潟県医師会報の第900号発刊を心よりお祝い申し上げます。本会報は昭和24年に創刊されましたが、それは奇しくも国立大学新潟大学の創設の年と重なります。まずは、この間、県医師会を支え、会報の維持・発展にご尽力された先人の皆様に、深く敬意を表するものです。

さて、新潟大学は、明治3（1870）年に設置された共立病院に端を発し、明治43（1910）年に開校した官立新潟医学専門学校が、新潟大学医学部の前身にあたります。この官立新潟医学専門学校が、大正11（1922）年に旧制新潟医科大学に昇格後、昭和24（1949）年5月に旧制新潟高等学校とともに複数の学校と統合、新製の国立大学新潟大学が発足して、現在の大規模総合大学に成長してきました。この間、医科大学から引き継がれた医学部附属病院は新潟大学医歯学総合病院へと変革を遂げながらその機能を強化し、質の高い医療人の育成や先端医療の推進を図るとともに、一方で新潟県や医師会と連携して地域の医療を支えています。その点では、新潟大学と新潟県医師会との関わりはきわめて親密で、しかも長い連携の歴史があります。

新潟大学は数年前に、直近の未来である2030年に向けて「新潟大学将来ビジョン2030」を策定しました。また、そこに向けて新潟大学が果たすべき使命・ミッションを、「未来のライフ・イノベーションのフロントランナー」となることとしました。ここでいう「ライフ・イノベーション」とは、単に「医療・健康・福祉分野」に留まらず、21世紀を生きる我々の「生命」、「人生」、「生き方」、「社

会の在り方」、「環境との関わり」と、それらの土台となる「地球」や「自然」についての新たな価値と意味を生み出すための革新を指しています。すなわち、新潟大学が目指す「ライフ・イノベーション」は、人類を幸福にするための革新です。このミッションのもとに、現在、新潟大学は教育・研究そして社会との共創を3本の柱として再定義し、さまざまなことに取り組んでいます。

このうち、社会との共創においては、文理融合・分野横断的な枠組みで、企業や自治体との共創を大学が主導する枠組み作りにむけて、「共創イノベーションプロジェクト（共創IP）」というものを提案しています。「コメ共創IP」、「おいしさDX共創IP」、「ものづくり共創IP」、「防災街づくり共創IP」など多様な取組がありますが、その一つに「地域医療DX共創IP」があります。これは、産官学民共創による新潟発健康未来社会の実現と持続的ビジネスモデル構築を通して、高齢化・人口減少、医師不足・偏在、医療アクセスの不均衡などの地域医療課題を、総合大学の力を活かして解決する試みで、すでにパイロット地域での取り組みが始まっています。このように、新潟大学は、医学部と医歯学総合病院だけでなく、全学の知を結集した取り組みの中で、ますます新潟県医師会との連携を深めていくことができると願っています。

最後になりますが、新潟県医師会のますますのご発展を祈念し、また会誌が一層充実し1,000号を越えて会員皆様に愛され続けますことを祈り申し上げます。

新潟県医師会報900号記念特集号に寄せて



新潟大学医学部

医学部長 佐藤 昇

新潟県医師会報900号記念特集号の発刊まことにおめでとうございます。昭和24年（1949年）の創刊号から76年の永きに渡り、新潟県医師会が会報誌を通じて、医療関係者のみならず広く社会の皆様へ情報発信を継続されていることに改めて敬意を表します。これまで携われた先生方や現在の編集部の皆様のご努力あつての賜物と思います。

新潟大学医学部医学科は、1910年（明治43年）官立新潟医学専門学校としてスタートしてから1万人以上に上る数多くの卒業生を世に送り出してきました。官立新潟医学専門学校の理念は「医師の養成は、専門学校を以て満足すべきにあらず」であり、今日の新潟大学医学部医学科は、この伝統を受け継ぎ「医学を通して人類の幸福に貢献する」という理念のもと、医学研究を推進し、医学の様々な分野で全国各地・世界各地で活躍できる人材育成を推進し、市民の皆様や地域、国際社会に対して貢献していくことを重要な使命としております。時代と共に変化する医学、医療、社会において柔軟かつ適切に対応する必要性は益々増してきました。

日本全体は人口減少が進行しており、2020年の推計によると、2029年－2032年には医師需給は均衡し、その後は供給超過になると見込まれています。一方で初期臨床研修の変化に伴い、大学から若手医師が減り、結果として医師不足地域においては、ますます医師不足に拍車がかかる状況となっています。この医師偏在に関わる問題は新潟県において特に顕著であり、医師不足の解消に向けて医学科では入学定員を臨時定員の地域枠40名を含む1学年140名と大学設置基準ギリギリまで

拡大して対応しています。これらの学生をしっかり教育していく体制はとても重要で、特に初年次を含めた低学年のうちから県内の様々な医療機関で実習する取り組みを進めています。新潟県医師会の皆様には県内各病院やクリニックに至るまで本学の医学生への教育に協力いただき、大変感謝しております。

今後、超高齢社会に移行する中で、高齢者の様々な問題に対応できる総合診療能力を有する人材を育成することが重要となっています。これまでの大学病院等をフィールドとする高度専門医療人材育成に加えて、地域の病院で活躍する総合診療ができる医師養成にも力を入れる必要があります。新潟大学では高度化する医療に対応するため臓器別専門化を進めてきていましたが、最近になって「総合診療学講座」を設置し、学生、若手医師のみならず医師のリカレント教育としての総合診療能力を高めるための取り組みを推進しているところ です。

地域医療を支えるこれらの取り組みに加え、国際交流の推進やデジタル技術と生成AIなどの技術革新なども含めた医学研究を推進する人材育成にも力を入れています。新潟県を中心とした地域の医育機関の中核として激動の時代を切り開いていきたいと考えています。新潟県医師会の皆様におかれましては、引き続き温かいご支援とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、会報900号発刊に改めて敬意を表しますと共に、新潟県医師会の益々の発展を心よりお祈り申し上げて、お祝いの言葉といたします。

県医師会報900号発刊を祝して



新潟大学医歯学総合病院

病院長 富田 善彦

県医師会報900号の発刊、誠におめでとうございます。これまでの歴史については他稿で詳しくのべられると思いますが、月刊で75年ですから、900号は新潟県医師会の活動が連綿として続けられてきた証左であると思います。

私が新潟大学を卒業したのが昭和60年（1985）になりますので、今年で40年になります。医師会員になったのは大学院の2年生になった時だったと記憶しています。その当時は、現在のように社会人大学院生として、臨床業務を行いながら大学院生として研究するといったスタイルではありませんでした。私は、医動物学教室の藤原道夫先生の教室で免疫学（腫瘍）を研究することになりました。今と違ってネット環境はありませんでしたから、健康保険や税金の対応は、皆、先輩や、同級生からの口コミの情報がたよりでした。それで、医師会に入って医師会の国保に入る方が良いと聞き、入会しましたので、ちょっと不純(?)な動機でした。最初にいただいた白い健康保険証の表紙には「0割」と書いてあったのを印象深く覚えています。自己負担が0であった訳で今では考えられません。大学院卒業後も、医師会員は継続しておりまして、笹神村で始めた前立腺がん検診に関連して県医師会報に前立腺生検の記事を掲載していただいたこともありました。

平成14年10月には山形大学の教授として異動いたしましたので新潟県医師会からは転出したしました。山形大学での12年と3か月は、様々な出身大学の先生方の中での仕事でしたので、いろいろな意味で勉強になりました。山形大学泌尿器科の様々な先生とのチームを作り上げながら、まった

く文化の違う他科の先生方と仕事をしていくことで、自分自身の仕事の仕方、人との対応も大きく変わることになりました。まず、相手の話をよく聞いて、理解することがもっとも重要でその実践を継続していくことになりました。

平成27年1月に新潟大学に戻ることになった際に、新潟大学出身で、山形で仕事をされている先輩にその旨をご挨拶したところ、「新潟は仕事がしやすいよ」と言われました。12年ぶりに帰ってきて、お会いする先生の多くの方が、お世話になった先生方でした。勤務医または開業された医師会員の先生から「久しぶりだね」「よく帰ってきたね」など、お声がけいただき、「なにか、実家に帰ってきたみたいだなあ」と感じたのを覚えています。同年の医師会報には「泌尿器科癌の診断治療－30年の変遷と現在」として綜説を載せていただきましたが、今読みかえしてみるとそれから10年で大きく変化していることに驚かされます。

平成31年4月からは新大病院長となりましたが、令和2年からはCOVID-19のパンデミックが始まり、県医師会の堂前会長先生、前副会長の塚田先生には、大変お世話になりました。新潟県では、パンデミックに対し、県、市町村、県内各病院、そして、県医師会の一体となった取り組みがあったからこそ、人口当たりの死亡者数、重症患者数が日本最低で済んだのだと思います。新潟の医療は県医師会を中心にワンチームであり、今後ともこの素晴らしい体制が継続されることを願ってやみません。今後ともどうぞよろしく願います。

デジタル化の中でも全員配送 －紙ならではの繋がり感－



新潟県医師会

副会長（元広報部長） 内 山 政 二

800号発行の時、私は県医の理事として会報発行に携わっていた。その頃既に学会誌や医師会報は紙媒体から電子媒体への移行が始まっていた。現在は日本医師会や多くの学会は紙の全員配送を止め、希望者のみの配送か、電子媒体による配布に移行している。印刷や輸送コストの削減、資源の節約という点では当然電子が優位である。しかし、新潟県医師会報は全員配送を継続している。会員同士の“繋がり感”は紙ならではの感触である。また地元の身近な情報が中心であるため、全国区の雑誌よりはめくられているものと思われる。

とは言え、紙オンリーにこだわっているわけではない。県医師会 HP のトップ面には会報最新号が毎回アップされ、一般の人が読めるようになっている。さらに、トップページ＞会員専用ページ＞新潟県医師会報には、2003（H15）年1月号から全て収載されており、タイトルや執筆者による検索も可能である。ダウンロードと印刷もスムーズに出来るため、本棚が狭い場合は会報を保管する必要がない。

医師会報は会員専用ではなく、一般社会への重要な広報媒体でもある。医師会の意見を広く発信

するため、報道機関や行政の関係部署、県内の各大学などにも毎号送付されている。県立図書館では郷土資料コーナーに置かれており、誰でも自由に閲覧できる。そのためか、思わぬ人から読みましたと言われることがある。

会報の発行は手間がかかる。OA 機器が普及したとはいえ、読み易く、分かり易くの工夫はいくらやっても尽きない。文だけでなく、図表のレイアウトや色もまた然り。写真よりもイラストが、カラーよりも白黒が見易いこともある。原稿の内容によっては掲載見合わせとなることもある。そして、1つ終えた時にはもう次の編集に入っている。併せて、もっと先の企画も始まっている。会報を毎月発行するため、広報委員会は開催回数が最も多い委員会となっている。自分の本業をこなしながら会報発行に尽力されている広報委員の皆様、そして縁の下の力持ち、事務局の皆様改めて敬意を表します。

1,000号は今から100カ月後、とすると2033（令和15）年6月か？その時私は80歳直前、紙であれ電子であれ、読むことができたらうれしい。



会報900号に寄せて

新潟県医師会

理事（現広報部長） 上野 光博

会報900号の発刊、心よりお祝い申し上げます。本会報は、昭和24年6月の創刊以来約76年間毎月発刊され、この3月号で900号を迎えました。これまで長年にわたり会報の発刊・維持・発展に尽くされた先生方と事務局の皆様に対して敬意を表しますとともに、会員の皆様のご理解とご協力に心よりお礼を申し上げます。

私は、平成20年4月から約17年間本誌の編集に携わってきましたが、この間の約200冊の編集を振り返りますと、とても感慨深いものがあります。

本誌には医学・医療・保健・医政等に関する学術的・専門的な原稿のみならず、医師会の活動や会員からのエッセイのような親しみやすい原稿も含まれております。また日々の診療や資格取得・維持に役立つ情報と共に、各種研修会、社会保険、社会貢献活動（学校医、産業医、警察医等）等に関する情報も含まれ、極めて多彩な構成となっております。有益かつ魅力的な会報になっていると自負しております。

一方、本誌も600号の平成20年からは時の流れとともに様々な変化を遂げてまいりました。まず会報のサイズも平成25年からB5判からA4判とな

り、構成も徐々に変化しました。「医政展望」は「論説」へ、「寄稿・随想」・「アフターファイブ」は「会員寄稿」へ、「郡市医師会だより」・「郡市医師会長の声」は「郡市医師会より」へ、「喫茶室」・「編集後記」は「広報委員の一言」へ変更されました。新たに「地域医療」、「私の臨床ノートから」、「研修医の声」、「白秋夜話」が加わり、「日医および国の動きと新潟県医師会の主張」と「医事統計」は廃止されました。また、最近の話題としては、医師の働き方改革、医師の偏在・高齢化、地域医療問題、医療機関の経営問題などが多くなっています。

会報は医師会員や研修医のみならず、全国医師会、県内保健医療団体、行政、報道機関、図書館等に配布され、さらに発刊後1か月間は県医師会ホームページで一般市民にも公開されております。また会員は同ホームページの会員専用ページで2003年まで遡って過去の記事を検索できます（図）。今後も会員の生涯教育、会員相互の親睦、相互理解等に資するよう発刊し続けてまいります。皆様のご理解・ご協力をお願い申し上げます。

一般社団法人 新潟県医師会
NIIGATA MEDICAL ASSOCIATION

文字サイズ 小 さ く > もとにもどす > 大 さ く

会員専用ページ | 新潟県医師会報

新潟県医師会報 投稿規程はこちら ログアウト

2003 年 月 第 号 < 前号 > 次号 > キーワード > 検索 クリア

376件中 361-376件 < 先頭へ < 前の20件 ... 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

■ 2003年1月634号

2003年1月634号 随想◇名犬セイジ君の夜 金沢光男

2003年1月634号 随想◇柴式部と藤原道長 阿波根朝宏

2003年1月634号 炉辺閑話

2003年1月634号 こしじ往來◇分水壩 五十嵐昭夫

図 新潟県医師会 HP 会員専用ページから

新潟県医師会報900号ついに発刊！ 広報委員が語る舞台裏と楽しみ



新潟県医師会広報委員会

委員長 佐藤 雄一郎

このたびの新潟県医師会報発刊900号にあたりお祝い申し上げます。また、このような節目のタイミングで委員長として携わられていることを光栄に思います。会報ナンバーは100号進むのに8年4カ月かかると言いますので、第1号が発刊されたところは戦後の混沌とした時期であったことが偲ばれます。これまでの長く険しい道のりを、弛まず広報編集という襷をつないでこられた先輩の方々に敬意を表するとともに、これからも良質な会報誌を世に出すという重大な責務を痛感しており身が引きしまる思いです。

さて、新潟県医師会報創刊号（昭和24年、1949年6月10日発行）に日本医師会の歴史が記されていました。1923年北里柴三郎博士を初代会長として法定上の日本医師会が発足し、1939年に大東亜戦争が勃発したことで日本医療団令・改正医師会令が公布され翌年に新生日本医師会が創設されました。終戦後、新体制の設立準備を始めていた矢先に、GHQによる戦争協力者の公職追放が医師会役員にも適応され（医師が患者さんを救うという本来の業務を遂行したことが、戦争に協力したという論理は納得いかないのですが、、、）、1947年までの日医役員、各都道府県医師会の支部長は新制医師会の役員を固辞するように命じられたそうです。当時の関係された先生方はさぞや忸怩たる思いであったことが拝察されます。そうはいま

しても、当時のGHQ通達は絶対的であり、本令には対抗できないまま1947年に新制社団法人日本医師会が誕生しました。そのわずか2年後の1949年に戦後初の新潟県医師会報が発刊されるのですが、創刊の辞で新潟県医師会長の中山栄之助先生は、実地医家・大学人・医学教育者などすべての医療者が自身の特色を生かした研究を発展させ、おたがい連携することが医学の理想に到達する要点であり、引いてはこのような活動を継続することで医療界は社会的に認知および尊敬されていくものと述べておられます。当時の状況と現代は世相や社会的背景も異なりますので、単純に比較することはなりません。戦後の苦境に匹敵する未曾有の事態が今も国外、国内で巻き起こっていることを考えれば、われわれが先人の考え方に学ぶ点は多かろうと思います。

今まで以上に、医療人は個人の利益のみを求めることなく利他の心をモットーに一致団結すること、改めて医療界の社会的認知度を高める必要があるのでしょうか。新潟県医師会広報委員会としても、常に本誌が国民の方々の眼にとまるものであることを意識して、社会的評価に耐えうる刊行物にすべく鋭意努力を継続していく所存です。今後とも、多くの先生方からは多彩な視点に立脚した投稿原稿などご支援のほどお願い申し上げます。



副委員長

橋 立 英 樹

春分の候、新潟県医師会会員の皆様におかれましてはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。平素は当県医師会広報委員会のお引き立てにあずかり厚く御礼申し上げます。

広報委員会副委員長の橋立英樹です。私は新潟市民病院の病理診断科で病理医をやっておりますが、縁あって県医師会広報委員となって早十余年が過ぎました。新潟県の病理医は大変不足しており、新潟市民病院においても常勤病理医は一人となってしまいました。なかなかタイトなスケジュールではありますが、アルバイトの先生方や

お手伝いに来られている先生方に支えられ、月一回の広報委員会、さらに月一回の発行打ち合わせ会への出席を何とか続けてまいりました。そして、喜ばしいことに、2025年4月からは、当科に常勤病理医が一人増になることが決まり、今後は少し楽になるかと胸をなでおろしているところです。

さて、新潟県医師会報は900号の記念号発刊を迎える運びとなりました。これもひとえに医師会皆様方の厚いご支援と温かい激励の賜でございます。ここに心よりの感謝を申し上げます。これを機に、いま一度初心に立ちかえり、より一層の会報の充実と向上に努めてまいります。皆様には今後とも倍旧のお引き立てを賜りますようよろしくお願い申し上げます。



委員

勝 井 豊

新潟県医師会が昭和24年4月に発足してから発行されてきた新潟県医師会報が、このたび900号を迎えたことを心からお慶び申し上げます。75年の長きにわたり医師会とともに歩んできた医師会報ですが、新潟地震や中越地震、中越沖地震などの災害時にも休刊することなく、その使命を果たしてきたことに、心からの敬意を表します。

医師会報は医師会と会員を結びつけて、医師会

を医師会たらしめる重要な役割をになっていますが、会員相互の交流や親睦を深めるためにも、なくてはならないものです。会員の皆様からの寄稿や郡市医師会からの便り、勤務医や研修医の皆様からの声などに身近に接することができて、広報委員としてのやりがいを感じさせられています。

「ファミリーダイアル」や「私の臨床ノートから」などの新潟県医師会報独自のコーナーを始め、トピックスや四季折々の便りを満載した会報になることを、願っています。皆様方からのご投稿をお待ちしております。



委員
高塚尚和

新潟県医師会報第900号、おめでとうございます。高桑好一先生の後任の大学からの委員として2020年（令和2年）4月から新潟県医師会広報委員会のメンバーに加わらせていただいております。いつ医師会に入会させていただいたか記憶になく、医師会の活動に参加したことは殆どなく、県医師会報が送られてきても、勤務医の広場や研修医の声、最近、掲載されることが殆どないファミリーダイアル等によく読んでいましたが、その他の記事は軽く目を通すだけでした。法医学が専

門で医師会とのつながりが薄い私を広報委員会に加えていただいたのは、山内春夫先生から強い推薦があったからです。

初めて出席した編集会議では、編集委員の先生のみならず、県医師会の副会長や理事の先生も出席され、これまで接することが少なかった医療の現状や制度等についての議論が多く、気後れしてとても発言できる状況ではありませんでした。委員を拝命したときは新型コロナのパンデミック直前の状況にあり、初めての懇親会等が中止されたのは痛かったです。編集委員として力不足ですが、次の1,000号に向けて努力して参りますので、これからもどうぞよろしく願い申し上げます。



委員
磯部賢論

新潟県医師会報創刊900号、おめでとうございます。900号という節目を広報委員として迎えることができ、とても嬉しいです。

私は長岡市の一開業小児科医です。月1回の広報委員会を何よりも楽しみにしています。

真面目な議論があったり、いやそうじゃない、わかっちゃいない、などと議論は脱線し、時には時間をオーバーしたり、笑ったりし、委員会は充実した時間で満たされています。

個人的には未熟さや不勉強を見つめなおすいい機会となり反省ばかりなのですが、先人の積み上

げてきた900号を見ても、充実した学術からエッセイまで、まさしく立派な会報なのだなあと感じます。

医師偏在、働き方改革、診療報酬の複雑化など、混乱した少子化多死社会を、医師らしく病みぬけるしかありません。単純な解決策があるとも思えませんが、そんな時こそ会員の意見を拾い上げ、皆に知らしめる会報は必要不可欠なツールであると信じます。

永遠に続く会報編集という櫂を次世代へつなぎたいとも思います。

会報を益々充実させ皆にとって有意義なものへとつないでいきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



委員
恩 田 晃

地元医師会の先輩の先生から引き継いで会報の編集に携わるようになってもうだいぶ長くなりました。この中でやはり一番の思い出は「ファミリーダイヤル」です。

今も時々寄稿していただいておりますが、以前は編集委員が毎月交代で担当して、ご家族に書いていただけるという先生を探していました。先生に承諾いただいてもそのご家族にご遠慮されてしまって、先生から申し訳ないとの丁寧なご返事をいただき恐縮してしまったということもありまし

た。親子2代にわたって原稿を頼まれたという先生もおられます。

寄せていただいた原稿はほのぼののしていて読んでいて思わず微笑んでしまうことがいつものことでした。800号記念の時に「ファミリーダイヤルメモリーズ」として特集したことが懐かしく思い出されます。

天候や交通事情によってリモートで委員会が開催されることもありますが、やはりみんなで顔を合わせて会議をするのが一番です。この頃は月に1回県医師会館まで出かけていくのが楽しみになっています。これからもよろしく願い申し上げます。



委員
平 塚 素 子

私は新発田北蒲原医師会からの推薦で、令和4年から広報委員となりました。まだ委員として未熟な故、毎月の委員会は仕事というよりも、勉強させて頂く場です。これまでやってみて、広報委員に必要な資質は「発想力」と「人脈」、そして「文章力」の3つではないかと感じました。「論説」、「Q&A」などの定常企画のトピックの選定にあたっては、最新の医療情勢を把握した上で、多くの会員が興味を持てる話題を思いつく発想力が求められます。トピックが決まれば、理事やベテラ

ン委員の先生方は新潟県の何処にどんな専門家がいるのかをよくご存知で、執筆の候補者をあっという間に挙げられます。そして、各委員に平等に回って来る「広報委員の一言（あとがき）」を書くために必要なのが、3つ目の「文章力」です。私のあとがきの理想は、食後のコーヒーのようにメイン料理を邪魔しない読み心地の良いものですが、まだ理想には程遠いです。

多くの広報誌が廃刊となっている昨今、この900号がまだ先へと続く通過点なのは大変喜ばしいことです。広報委員として微力でも貢献出来ればと思っておりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。



委員
永井 雅 昭

新潟県医師会報900号発刊おめでとうございます。広報委員の永井と申します。

前回800号の所感を書かせていただいてから、100回も会報の編集に携わらせていただきました。時の経つのは速いものです。この間、多彩な会員の皆様から、学術、医療活動、趣味、スポーツ、芸術活動などご投稿いただき、そのすばらしい才能に触れさせていただくことができました。心よ

りお礼申し上げます。

また、広報委員の末席に座らせていただき、月一回、広報担当の理事の先生方や他の広報委員の先生方と意見交換ができたことはたいへん有意義であり、楽しい時間でもありました。

新潟県医師会報は会員のみならず、各自治体、公立図書館などの公的機関、全国の都道府県医師会に届けられます。今後も新潟県医師会の活動を、品位を保ち、格調高く全国に発信できるよう微力ながら努力して参る所存です。会員の皆様のなおいっそうのご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。次第です。

